

当別町 140 年特別企画

第 12 話 最終回 歴史の伝承の今昔物語



開拓から 140 年の今年、当別町の歴史が様々な場面で再認識された。写真は、うっそうとした原生林の開拓を表現するダンス（当別小学校運動会）

①歴史を伝える

当別町の小学校では郷土読本があり、本町開拓の歴史を小学校 4 年生で習うことになっています。

明治維新後、政府は国策として北海道奥地の開発を急ぎました。屯田兵や旧士族による開拓の様子は、それぞれの町の沿革に記録されていますが、当別町の開拓の歴史がこと細かく意識され、伝えられているのは、本庄陸男による小説「石狩川」の存在が大きいからです。

北海道立文学館の名誉館長 きはらなおひこ 木原直彦氏によると、彼がなぜ「石狩川」を書いたかについては、「生活苦の中にありながらも開拓に向かう父祖の思いと、破産に

よる絶望、先祖の生い立ちを見つめた時、昭和 10 年代という戦争に向かう時代背景と、明治維新による近代日本の矛盾が重なり、自分史のような視点で描きたかったのでは。」と話しています。小説は複雑な時代背景を描写しながら、自らの生き方を探ろうとする意志と情熱が込められ、文芸評論家、歴史家からも評価の高い作品なのです。

戦後、町内においても本庄の作品を高く評価し、後世に伝えたいという動きが起こりました。その中心は当時、北海道新聞社学芸部に勤務していた故 ふじさわたけお 藤澤健夫氏で、親交の深い多く

の作家、文化団体に文学碑建立の協力を要請するとともに、町内でもその機運を高めていきました。

活動を始めてから約 10 年、文学関係者の寄付や町の助成により建立資金も集まり、本庄を知る人達とその日を迎えます。

昭和 39 年 7 月 23 日、文学碑「石狩川」の除幕式が、本庄陸男の生家から程近い石狩川右岸の堤防で行われました。作家の伊藤整、やぎよしのり ふなやまかおる おだぎりすすむ 八木義徳、さらしなげんぞう 船山馨、小田切進、更科源蔵など著名な文化人が一同に会し、その功績を讃えたのです。この日は本庄陸男の 25 周忌に当たる日でした。



執筆中の本庄陸男

明治 38 年 (1905) 生～昭和 14 年 (1939) 没
当別村ピトエに開拓農民から荒物雑貨商を営んでいた佐賀県士族の本庄 かずおき 一興の六男として生まれる。大正 2 年、北見上渚滑の開拓地に再移住。同地で小学校代用教員などを経て大正 10 年上京、青山師範学校 (現東京学芸大学) に入学。東京で教師のかたわら作家活動を行う。前衛芸術連盟に参加するなどプロレタリア活動に傾倒する中で昭和 14 年に小説「石狩川」は刊行された。しかし発表から 2 ヶ月後、肺結核のため 34 歳で亡くなります。



文学碑除幕式で献花を行う故人の妻 たま子氏と兄の本庄廉一氏 (左)



文学碑除幕式で司会を務める藤澤氏

藤澤健夫氏

明治45年(1912)生～平成2年(1990)没
当別村(当時)に生まれる。昭和6年、札幌第一中学校(現札幌南高等学校)卒業後、小学校の代用教員として江別第三尋常小学校で教鞭をとる。昭和16年、記者として北海タイムス(現北海道新聞社の前身)に入社するまでの10年間、少年の舞踊を研究、普及にも努めた。昭和34年、当別町教育委員長、昭和46年、当別町史編さん委員を歴任。

本庄陸男の文学碑は昭和39年建立。同年代のプロレタリア作家小林多喜二の文学碑(小樽市)より1年早かった。



文学碑建立記念事業(昭和39年)

7月23日

- ・文学碑除幕式(10:00～11:50)
- ・記念講演会(15:00～17:00)

農協会館

- ・演劇「石狩川」発表会(18:00～)
- 当別町体育館(24日も)

7月24日

- ・北海道文学集会(10:00～14:00)
- 当別高校

演劇「石狩川」発表会



②映画と演劇

多くの劇作家にも感銘を与えた「石狩川」は、まず東宝で映画化が準備されましたが、開拓当時の原生林や広い大地が残っていないこと、スケールの大きな歴史的背景、資金面などから映画化は断念されました。その後、原作に惚れ込んだ東映の佐伯清監督が豪華キャストを投入し、半年間の撮影の末、当時としては空前の歴史超大作として、昭和31年1月29日に公開されたのが映画「大地の侍」です。

「十何年も前に、歴史小説「石狩川」が「大地の侍」として映画化され、当別町で上演されたとき、われわれ郷土人は胸をしめつけられるような気持ちで観たものでした。その時、われわれは他の町村と違って、こうした歴史を持つ町に生まれた誇りをしみじみと味わったものです・・・」

文学碑「石狩川」建立委員長(当別町長)近藤辰雄氏の挨拶。

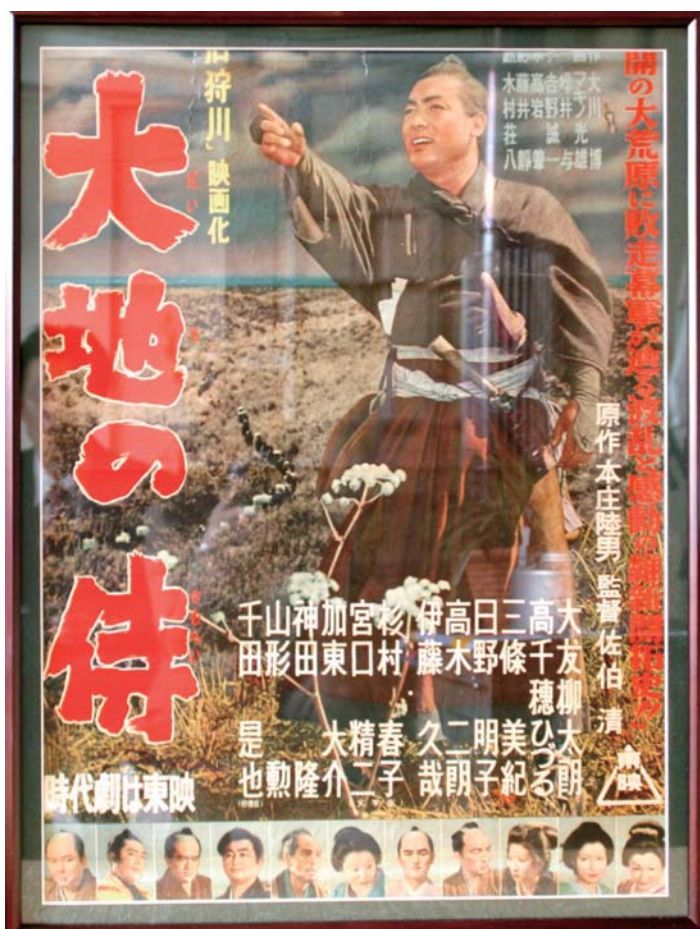
昭和39年7月23日、完成間もない当別町体育館(旧公民館)で演劇「石狩川」が札幌の6劇団の合同で上演されました。「石狩川」の劇化は昭和14年、当時の新協劇団(東京)が2部に分けて上演の記録がありますが、地元北海道の劇団による本格的上演が小説の舞台となった当別で実現したのです。

舞台の狭い演劇では映画以上に脚本、演出の腕が必要となるもので、その脚本は脇哲氏が担当し、原作以上に滅びゆく者、新興勢力の象徴的人物の対決を軸に内容が掘り下げられました。

北海道立文学館の木原名誉館長は、今年10月23日に白樺コミセンで開催された「当別文芸セミナー」でこう締めくくりました。「当別町で行われた文学碑の建立は、文学集会、演劇の上演など、幅広い町民有志により関連事業が多彩に行われ、北海道の文学運動の先駆けとも言える出来事であったのです。」

「石狩川」は壮大なスケールの原作のために映画化は何度も見送られた。東映の佐伯清監督がスタッフと共に努力した結果、構想3年、脚本の書き直し8回、現地ロケ半年、制作費7千万円という、当時としては空前の超大作であった。出演の役者達も主演の阿賀妻謙には大友柳太朗、女優も高千穂ひづる、杉村春子など当時の看板俳優が多く出演している。

現存するフィルムは当別町と宮城県大崎市(旧岩出山町)の2本しかなく、幻のフィルムでもある。(ポスター:武田龍太郎氏所蔵)



町民劇 石狩川

町民劇「石狩川」のクライマックス
全員が「ここがトウベツ、われらがトウ
ベツ」と唱和する。



③時代を超えて語り継ぐ

平成17年11月6日、500人の聴衆を集めた総合体育館では、本町初めての町民による劇「石狩川」が上演されました。

(社)当別青年会議所の創立25周年として町民劇実行委員会「とうべつルネッサンス実行委員会」が立ち上げられ、公募に集まった町民キャストは35名、これに舞台、照明、演出のスタッフ40名が加わり、上演時間3時間、ただ一度きりの公演が行われました。

本番直前、「素人による演劇が時にはプロにはない、きらりとしたまとまりを見せる。」町民劇の脚本に協力をいただいた俳優で脚本家の齊藤歩氏は、不安がぬぐえない劇団員を励ましました。

上演中より、スタッフの中には言い表せない連帯感、充実感が満ちていました。クライマックスは第2次移住者がトウベツに到着

し、再開を喜ぶシーン「ここがトウベツ、われらがトウベツ。」この台詞には、肥沃なこの土地にやっとたどり着き、未来へ向かっての希望が溢れ出ていました。拍手が鳴り止まず、出演者と観衆は、小説「石狩川」をタイムスリップして疑似体験し、先人の苦勞を思い起すことができたのです。

その5年後、140年を迎えた当別はまた新しい形で歴史絵巻を表現しました。10月10日に行われた「姉妹都市パレード」は、当別町と姉妹都市にあるスウェーデン王国レクサンド市、宮城県大崎市、愛媛県宇和島市からそれぞれその町を代表する文化を表現し、本通りをパレードしたのです。広報11月号でお伝えしたように、雨が降り止んだ沿道には3千人もの町民が、姉妹都市という絆で結ばれたパレードに新たな文化を感じ、歓声を上げていました。140年の月日を経て、当別町は

様々な経験をしてきました。その時々、先人の思いを伝える試みが続けられてきたのです。

当別町の140年を記念して連載した特別企画「今昔物語」は、今号をもって終了いたします。

多くの読者から指摘や激励を受けながら1年間続けることができました。取材にご協力いただいた皆様には改めて御礼申し上げます。

完

■参考文献

- 当別町史 (1972)
- 本庄陸男と当別 (2004)
- 文学碑「石狩川」建立記念 (1964)
- 町民劇「石狩川」パンフレット (2005)
- 広報とうべつ (1964 6月号)

■情報課広報広聴係

☎ 23 - 3069



大崎市岩出山で行われている政宗公祭りを再現したパレードでは甲冑武者、陣羽織を着用した40人の武者行列が登場。宇和島市の牛鬼行列やスウェーデンレクサンド市の民族衣装など、各地域が、それぞれ父祖からの伝統を受け継いでいることを印象付けました。

